やさしい自然派住宅の
つくりかた

そざい
Sozai Note
のーと

vol. 14

『そざいのーと』バックナンバーは
ホームページをご覧いただけます
『www.saijo-d.com』

オーガニック建築Ⅳ

テームズ河岸再開発
サスティナブルコミュニティ
『ロンドン グリニッジ ミレニアムビレッジ』

英国ロンドンの世界遺産都市グリニッジには、有名な天文台の他、国立海洋博物館やグリニッジ公園など観光の見所が満載。そんなテームズ河岸のグリニッジ半島で、草木も生えていない、元ガス製造基地跡の土地を買収して行われた再開発事業が、グリニッジ・ミレニアムビレッジだ。

都市空間に、ひとつの村のような、コンパクトで親密な居住関係を取り戻す試みとして、チャールズ皇太子が積極的に推進した「アーバンビレッジプロジェクト」のひとつ。基本的には自家用車を使用せず、様々な階層の人々が一緒に住み、用途が混合するコミュニティを目指している。近くにはミレニアムドームがあり、エコロジーパーク・集合住宅・店舗・小学校・アーバンセンター・コミュニティセンターなどが集約され、大規模な集合住宅団地が形成されている。その中でも、テームズ川に面したビルタイプの住棟は、エコロジーパークに隣接し、さらに人工池を取り囲むように建てられていた。壁の一部やバルコニー・木製窓・ドアなどは、環境に配慮された塗料や木材を使い、高気密高断熱仕様となっていて、カラフルにペイントされた建物は、ビレッジ全体をポップな雰囲気に仕立てている。またこの住棟の裏手側には、職住一体型の併用住宅・戸建住宅・賃貸住宅と思われる建物などが建ち、サスティナブルコミュニティビレッジとなっている。

このプロジェクトの基本プランには、持続可能なサスティナブル建築としての計画目標が掲げられていて、消費されるエネルギーの削減と節水することを目標に、パッシブエネルギーを積極的に取り入れている。強い風の影響をおさえ光や熱を最大限に確保するように、建物の形状や位置が定められて、エネルギーを自給するために、前回紹介した『Bed Zed』と同じCHPコージェネレーションシステム（熱とエネルギーを同時に作りだす）をイギリスで初めて採用。エネルギー負荷を80％削減できるかが試されている。また、汚水をリサイクルシステムによって浄化し、トイレなどの水として再利用することで、30％の節水を目指している。建材は、リサイクルが可能で耐久性の高い素材を積極的に使用するなどにより、建設廃材の50％の削減推進が図られている。また、公共交通機関の利用や自転車交通の促進、駐車場の利用料を高額にしてカーシェアリングを促すシステムを取り入れるなど、トータルでCO2の排出量をゼロ化する取り組みがなされている。

同時に、テームズ河岸の野生生物が生息した環境を再生させる目的もある。目の前にテームズ川、裏には水鳥が戯れる人口池、そして、さまざまな生き物たちが生息するビオトープが整備されたエコロジーパークが隣接している。

人工池に面した住棟はリゾートマンションのようなたたずまい。

住棟を横目に木道を進むと、途中にバードウォッチング用の観察小屋があったり、のぞき穴のついた柳の枝のフェンスがあったりと、楽しく公園散策が出来るように工夫されていた。見学中も、人工池にはカモやガチョウの親子が人慣れした様子で泳いでいた。水鳥が集い、トンボが飛び交う素朴な風景は、まるで以前から存在していたかのような、独特の自然環境と居住空間を共有していて、豊かな住環境をうかがわせている。

日本で、持続可能で環境に負荷をかけない、環境共生住宅を促進する取り組みがなされたのは、1990年中頃のこと。当時は、いくつかの推進事例もあり、首都圏ではビルの緑化も盛んで、屋根や壁面の緑化を積極的に取り入れていた時期があった。現在は、こうした動きは停滞してしまった気がするが、環境に負荷をかけない建築デザインと建材を積極的に使用した住まいづくりは、僕たちの原点になっている。

低層プレハブ建築の建物も隣接している。

文・西條 正幸
自然派空間デザイナー

北海道伊達市出身。
自然と人にやさしい建築デザインを専門とし、
建築デザイン事務所ビオプラス西條デザインを主宰。
オーガニックな暮らしをライフワークに、
仲間との有機農園やマーケットの運営、
講演会やワークショップなども企画、開催している。